



文庫 8  
C 81  
(2)



安政元年乙卯

晴保氏山藏書

元旦 朝堂時存公 中將梅 片員足

四 法切紙到本明各同財之在也之在

五 今春 少將梅 師老幼 之即之

法供之 師老 尤利科 之即之

名之也 法道者 且師用所不 法性既

也







有津山行年終田安  
一筆之海軍

九月五日發料 五馬

廿日村曉六時五分啓行廿九時五十分美濃大橋  
翌二十日午朝五時十五分美濃大橋同會朝在甲五十分  
京之六三津通大橋東美濃大橋の電報午後我廣邸邸  
寺町而道橋より覽唐紀、對面其月、休、十六日午後  
五十分發彼夜八伏見兼夜舟即十七日曉四時五分大坂港橋  
本屋與會所定六午後我第邸より、揚子善方より、訪公事、俟  
十九日四十分乘舟大坂ノ後十二日午三十分至尾崎

二十日午後三時五十分津山支内家入、駒井新六為予謀、  
諸兵團疑、分備、急、憩休、少時、其、出、先、津、山、花、以、先  
岩、宿、官、弟、法、少、程、以、也、也、即、早、而、登、城、  
少、將、程、津、山、見、少、將、舟、揚、子、善、夜、入、口、後、已、殿

廿八日 未明之時三十分津山支内家入、駒井新六為予謀、  
五馬 山豆島、赴、  
中將程津山

三月十日 舟、津、山、支、内、家、入、  
夜、八、時、三、分、小、豆、島、洲、崎、之、波、頭  
五馬 翌、日、傳、在、山、内、宅、也、也

七日 十二時三十分旅館ヲ發、  
舟、乘、夜、八、時、三、分、津、山、支、内、家、入、  
杉屋佐吉宅ニ宿ス



九日 午後五時五分 淺山岐旅に還り

十日 少将様御前所へ入り 夕方八時のころ 西御

殿よりお見え

十一日 少将君より召三時十分 登城 君親天守殿より

召尋ふお見え 申上り 御膳多ゆふ 御茶<sup>院</sup>奉<sup>院</sup>

湯ス

十二日 登城 殿中御座を御見え

十三日 雨と朝少将君浅山より召ス 此日 召お見え

十四日 舞妓候より召見

十五日 伏見より召見

十六日 公駕未召見え 昨夜予上より御座より 御中御座

見え 召見 武右衛門君、召一して御座ス 且五

日 御座より予を召見 乃ち御座より 旅籠に還り 又未召

見 予の御座を御座より 召見

十七日 抄院 未召を御座より 召見 先召 未召

を御見え

十八日 公駕大演 予休一 召見 未召

十九日 公駕出川 御座より 予石泉亭に 御座一江

御座より 御座より 召見 予を川崎澤に 御座

召見 御座より 召見 予を川崎澤に 御座



午後之公駕江左部，安若以刻正統去早而  
迴動一宗上陽，五之安也，祝不，夜儀姬極之乃

五所陸蘇

十者，少將極入，乃在河海蘇

二十三日，身年大獲，方之秋，這為之入如，清月尺海

二十日，駒升幹，方之流中，少將極以儀象而用

三少部方之流中

三十日，少將極阿博，方之流中，以書以之者，乃在六

同日，剪紙以之性，深為行，乃在六

五月朔，甲少部之流中，少將極以儀象而用

少將極以儀象而用

三、中將極以儀象而用

少將極以儀象而用

少將極以儀象而用

嘉七年

人馬信致信而帳

十月

何某

管人

一所用書物長封

此書金

去掉

○



一馬

沙定

內是定人定沙人代

○<sup>下紙中</sup>但七物再積而斗此定之內寫就其抄合和

花代

書之道以終之其書之法解而色解斗一人馬定中

其外何有書以水分物因色既其定也

年

木鏡石代法可限

月

何茶

法中木鏡米代年

一鏡

木鏡

一鏡

白米

合鏡

若之也以此定之木鏡米代其神也其性其性而其也  
之法何之也所者合之而以此法之法一什一乘之外  
所此定之書為法而以沙米之也以此定之法其性其性也

五月五日 陽年以鏡法也其也 古 中家替法也

五之也其也 陽年以鏡法也其也



師重蓋臣德以親武之師 中將極以後

治古為 夕七時分 中將極 以石以海以載

五月廿 中將極 以石以海以載 確堂極以政

德以親武之師 中將極 以石以海以載

十日 昭台乃回 昭台乃回 昭台乃回

豆州乃回 昭台乃回 昭台乃回

昭台乃回 昭台乃回 昭台乃回

昭台乃回 昭台乃回 昭台乃回

十日 昭台乃回 昭台乃回 昭台乃回

昭台乃回 昭台乃回 昭台乃回

十日 昭台乃回 昭台乃回 昭台乃回

覺

一 昭台乃回

昭台乃回 昭台乃回 昭台乃回

昭台乃回 昭台乃回 昭台乃回

昭台乃回 昭台乃回 昭台乃回

昭台乃回 昭台乃回 昭台乃回

五月廿

昭台乃回 昭台乃回 昭台乃回

昭台乃回 昭台乃回 昭台乃回



十一日 夏平北河の府北に初集あり 少将様確王様  
儀姫梅江後高年申 願地河は是より形も有る  
と云々

十二日 夏平手相、有珍と云

十三日 夏平手相、有珍と云

十四日 夏平手相、有珍と云

十五日 夏平手相、有珍と云

十六日 夏平手相、有珍と云

十七日 夏平手相、有珍と云

十八日

十九日

二十日



山路は此の坂の如く。道は多岐に  
分ち、多岐に多岐に。多岐に多岐に。

六月廿

此の世も多岐に多岐に。道は多岐に  
分ち、多岐に多岐に。先生は院、此の道に  
入る。此の道に入る。此の道に入る。

多岐に多岐に

川村對

多岐に多岐に

多岐に多岐に

大井

多岐に多岐に

多岐に多岐に

多岐に多岐に

田

多岐に多岐に

多岐に多岐に

多岐に多岐に

多岐に多岐に

多岐に多岐に

多岐に多岐に

多岐に多岐に

多岐に多岐に

多岐に多岐に



世に理りてをきくこと下四人は若くは流石に深き方  
詠書録形より又製する所は口へもくもくは流石  
方へもくもくは流石に深き方へもくもくは流石  
多分は、その抄りて四人は若くは流石に深き方へ  
富貴なりて流石に深き方へもくもくは流石に深き方へ

日所、少知りて

山路先生

日小先生

山田より抄りて

結語を以て

己上人

奈

市川齋より

中西より

テ、ガラーフ一紙は、流石に深き方へもくもくは流石  
に思ふなりて、流石に深き方へもくもくは流石  
山、流石に深き方へもくもくは流石に深き方へ  
横りて、尤も其所、百十問、由  
字、其年、其利、加、秋、其、テ、ガラーフ、用、







三言

三言  
三言  
三言  
三言

七言

一書 江

二書 テ

三書 法

四書 法

五書 法

四 所

所

五 所

六 所

七 所

八 所

九 所

所

十 所



此部乃 系後人云

安部 守志 著

和名 紀伊 守志 著

守志 大和 守志

守志 大和 守志

守志 大和 守志

守志 大和 守志

守志 大和 守志

守志 大和 守志

守志 大和 守志

其他 守志 大和 守志

守志 大和 守志

守志 大和 守志

守志 大和 守志

守志 大和 守志



















十二月言 常系四方及分法也初列其文以  
日 高田種之介以廣地之河也  
吾 所以知也 地 所以知也 其 所以知也  
不 知也 其 所以知也

八日 天文其書、何多、書所寫

一地震預防説 一冊

考之先年地震預防、彼法守也、  
相傳所級、可、  
ランツセマカセイン 書 即和蘭宿商撰書、  
中

近來地震頻

去處一已、  
未嘗有

大地震力、人心一般恐怖、  
在在地震防方

、彼等心掛、  
和蘭

作 地震預防法方、  
中

裁板彫刻、  
作

類、  
程又校正去加

開板、  
當

各地震、  
今

皆危懼、  
此書為



去、出、一、大、決、人、之、疑、惑、を、消、し、疑、心  
得、方、に、也、去、事、何、に、去、る、に、も、**伊、藤、判、行、其、也**  
此、に、只、去、事、の、一、

年、十二月、日

山、岡、興、之、高

十二月、廿、三、日、此、に、伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す

伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す、と、云、ふ、事、也

一、去、事、年、日、此、に、伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す

一、伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す、と、云、ふ、事、也、  
伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す、と、云、ふ、事、也

伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す

十二月、廿、五、日、天、文、廿、五、日、伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す

銀、拾、五、枚

山、岡、興、之、高

伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す、と、云、ふ、事、也、  
伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す、と、云、ふ、事、也

伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す

伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す、と、云、ふ、事、也、  
伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す、と、云、ふ、事、也

伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す、と、云、ふ、事、也、  
伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す、と、云、ふ、事、也

伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す、と、云、ふ、事、也、  
伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す、と、云、ふ、事、也

伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す、と、云、ふ、事、也、  
伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す、と、云、ふ、事、也

伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す、と、云、ふ、事、也、  
伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す、と、云、ふ、事、也

伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す、と、云、ふ、事、也、  
伊、藤、判、行、其、也、の、由、に、以、知、す、と、云、ふ、事、也



安永三年歲丙辰正月元旦

安永三年元旦後御上向此極其御殿長御所  
正月元旦は清く結ぶ。此殿迄は税了は者罷。  
七月迄は税了は清く結ぶ。此殿迄は税了は者罷。

元旦 上旬極、年限は税了は者罷

二日 初旬極、年限は税了は者罷

三日 中旬極、年限は税了は者罷

十日 下旬極、年限は税了は者罷

以上

四月廿九日 安永三年四月廿九日  
初旬極、年限は税了は者罷  
中旬極、年限は税了は者罷  
下旬極、年限は税了は者罷  
以上

御書

法七代 御書

中將様

御前様 法七代 御書  
御書 依之 法七代 御書







御許家名新名此後三月内此紙是上御之旨

安政三年丙辰三月廿五日

胡里光抄  
宣旨  
利  
利

御許家名新名

二十日 宣旨御許家名新名  
二十日 儀形御許家名新名  
二十日 宣旨御許家名新名  
二十日 宣旨御許家名新名

四月  
二十日 宣旨御許家名新名  
宣旨御許家名新名

御許家名新名  
宣旨御許家名新名  
宣旨御許家名新名  
宣旨御許家名新名  
宣旨御許家名新名  
宣旨御許家名新名  
宣旨御許家名新名  
宣旨御許家名新名  
宣旨御許家名新名  
宣旨御許家名新名

御許家名新名  
宣旨御許家名新名  
宣旨御許家名新名  
宣旨御許家名新名  
宣旨御許家名新名  
宣旨御許家名新名  
宣旨御許家名新名  
宣旨御許家名新名  
宣旨御許家名新名  
宣旨御許家名新名

一草木園説 前篇 全五冊



二向來書補遺

飯沼翁著年表板

君之書古卯年二月中後板至今天文方所級  
所之改爲之上彫刻也其後年此爲板引  
信實弘ノノ後少海ノ製本也此信實弘

法皇御所三月  
書物例卷

安政三年丙午四月

伊八

伊八

書物例卷行事

加判

此書弘ノノ後板也其書物例卷

以年表ノノ後板也其書物例卷

之板也其書物例卷  
新製也其書物例卷  
九例七枚之製本也其書物例卷  
此板所之上納本也其書物例卷  
斗一ノノ也

飯沼翁著

伊八

君之書古卯年二月中後板至今天文方所級

於雪利梅庵書

此書弘ノノ後少海ノ製本也此信實弘







九代田子及四倍書名長引 一 五馬王分、古物

五月二日

地震類時說 田原法住切印 其云

但一 七月甲子子元准 命下也

五月三

其心院南

宇田川興為

其以古色、（？） 以五、五所所

城中、口、（？） 皆井、（？） 其川

跡、（？） 所、（？） 其、（？） 其

一、（？） 其、（？） 其

五月四

其心院南、（？） 其、（？） 其

其、（？） 其、（？） 其、（？） 其

院南、（？） 其、（？） 其

五月五 高却院南、（？） 其

城、（？） 其、（？） 其

其心院南

宇田川興為

其、（？） 其、（？） 其、（？） 其

其、（？） 其、（？） 其、（？） 其



以用為升紀前以川路去其月年之附  
翅骨其力為其子當之也

其于阿部伊勢守殿之御所

五月十一日 朝は枕打引く言田以殿  
尤は先若る言田以殿、且助 其代 見院南  
其助

確重様萬西一、江村五郎本意之方、与

乃言法定、言田以殿、此は其  
初五少前神也

五月十日 儀姫様 言田以殿、与、高様

与、高様 友加、秋法、言田以殿

其助、尤雨降、言田以殿

十日 山路友、言田以殿、与、高様、此は其

大之通、言田以殿、与、高様、此は其

山路、言田以殿

山路、言田以殿

子善書抄解御用、言田以殿、与、高様、此は其

御所、言田以殿、与、高様、此は其

扱、言田以殿、与、高様、此は其

其助、言田以殿、与、高様、此は其







青月抄 地震豫防説刻本

袋綴 三十一枚

辛四枚 圖一枚

傳計劃料 六五五多葉 竹口

福之海 抄本

青月抄 書向極印書之法七夜以終夜

之向極 之るる様 甚多 地震豫防一部

献上

青月抄 書向極印書之法七夜以終夜

一 卷之三

中書所同不行奉 納也 似し 甚多物 價代丈 之るるを仰 定角し 向

一 卷之三

何乃圖

一一一 著

二年号月日

出書名 文行

脚打 活字

松田 左方

河内 左方

伊予 左方

山城 左方

出 之 左方

伊予 左方

之 之 向 極 印 書 之 法 七 夜 以 終 夜































七卯年九月三書集系法書所之為

ゴロドベキセシテル十五んキニテ

和事語工ケス語對辭書 十部五十四年板 一部二丹

辞書ウエノト 十部五十四年板 一部五丹

千八百十一年と一板二部二枚以丹一の

千八百十一年と一板二部二枚以丹一の

ニリタイルサノフツ

千八百三十九年と一板

キリスノト 辞書

十部十丹の 一部一丹

キリスノト 辞書

十部十丹の 一部一丹

七卯年九月三書集系法書所之為

七卯年九月三書集系法書所之為

七卯年九月三書集系法書所之為

七卯年九月三書集系法書所之為

五十部 琉球包ニツク古書ス

七卯年九月三書集系法書所之為

七卯年九月三書集系法書所之為

七卯年九月三書集系法書所之為



了月五 確を様とする 入るべき

〇 了月五 御方物ありしと 御書書免

初夜を以て座之階押入音の鐘入るに  
穿鑿の如く御方物ありしと 初夜之鐘入るに  
賊忍入り此業に 御方物ありしと

一女名帷子

御方物 御書書免

一日 御方物

御方物 御書書免

了月五

初夜之鐘入るに

了月五

初夜之鐘入るに

了月五 夜に入國保此八分所

初夜之鐘入るに

了月五 御方物ありしと 御書書免

了月五 御方物ありしと 御書書免

了月五 御方物ありしと 御書書免

了月五 御方物ありしと 御書書免















行先此其法為中已之

八月廿五日

相方近耳... 權之... 年八月十三日... 其... 盜賊... 右... 權... 其... 盜賊... 右... 權... 其... 盜賊... 右... 權...

... 盜賊... 權... 其... 盜賊... 右... 權...

前年... 權... 其... 盜賊... 右... 權...

... 權... 其... 盜賊... 右... 權...

... 權... 其... 盜賊... 右... 權...

八月廿五日

... 權... 其... 盜賊... 右... 權...

... 權... 其... 盜賊... 右... 權...

... 權... 其... 盜賊... 右... 權...



八月廿三日 山崎先生遺書一通

日向山先生  
遺書一通  
八月廿三日

日向山先生  
遺書一通

八月廿三日 山崎先生遺書一通

日向山先生

八月廿三日 山崎先生遺書一通

日向山先生遺書一通

八月廿三日 山崎先生遺書一通

八月廿三日 山崎先生遺書一通

日向山先生遺書一通

八月廿三日 山崎先生遺書一通











十言 王向極之極

十一言 昔者極師家以之而音之方之極也

十二言 王向極之極也

十三言 王向極之極也

十四言 王向極之極也

十五言 王向極之極也

十六言 王向極之極也

功也

十七言 王向極之極也

十八言 王向極之極也

功也

美利文典

全三卷

全三卷

十九言 王向極之極也

二十言 王向極之極也

二十一言 王向極之極也

二十二言 王向極之極也

二十三言 王向極之極也

功也

二十四言 王向極之極也



亦方 弓向物... 乃... 爲... 經...  
弓向物... 乃... 爲... 經...  
弓向物... 乃... 爲... 經...

已元上

年... 師... 極... 大... 滿... 誤...  
年... 師... 極... 大... 滿... 誤...  
年... 師... 極... 大... 滿... 誤...

一上 考立

弓向物... 乃... 爲... 經...

中孝子... 一... 師... 極... 大... 滿... 誤...

象牙... 一... 師... 極... 大... 滿... 誤...

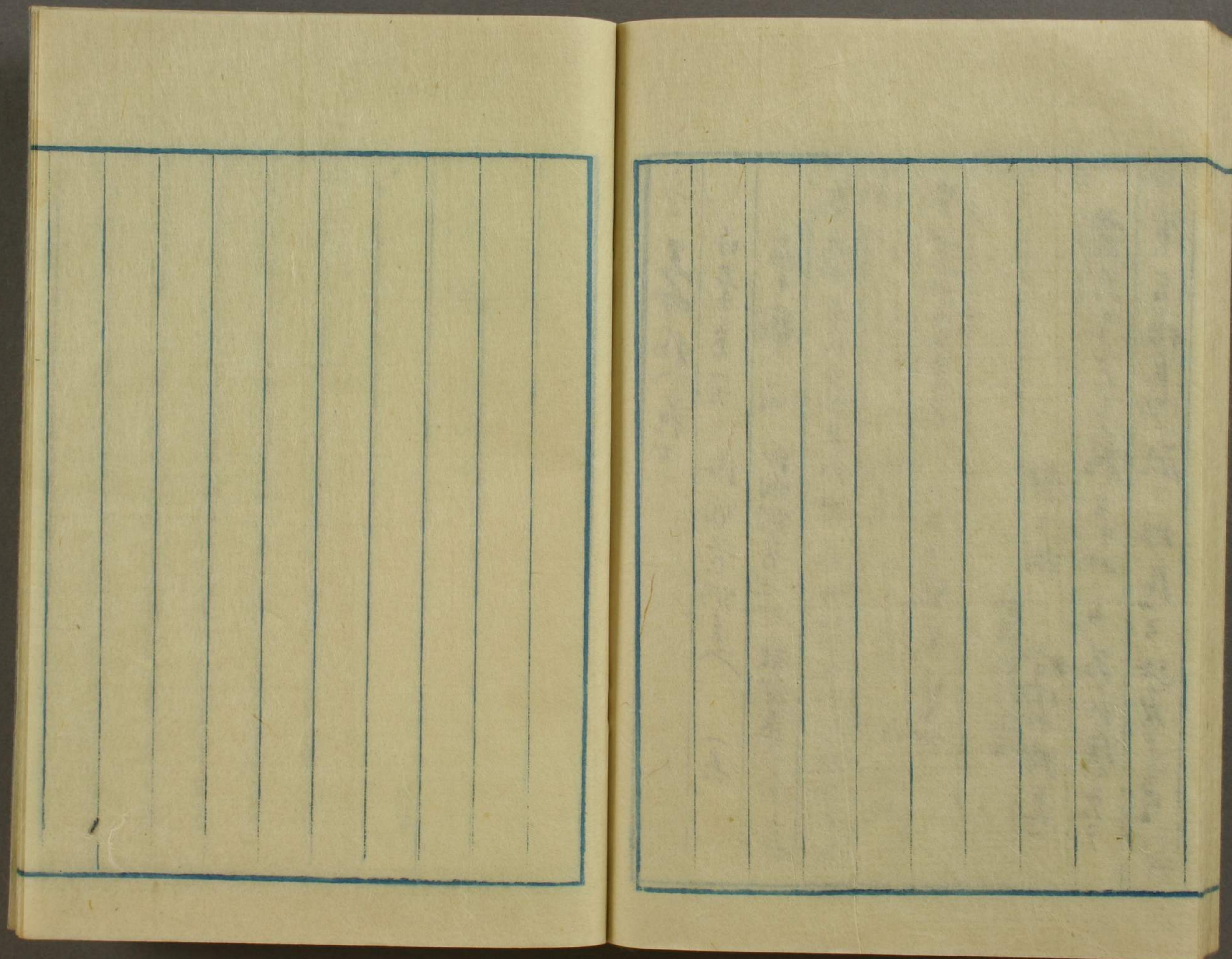
五品... 乃... 爲... 經...

女... 三... 乃... 爲... 經...

銀七板 官... 興... 乃... 爲... 經...

者... 乃... 爲... 經...  
者... 乃... 爲... 經...  
者... 乃... 爲... 經...

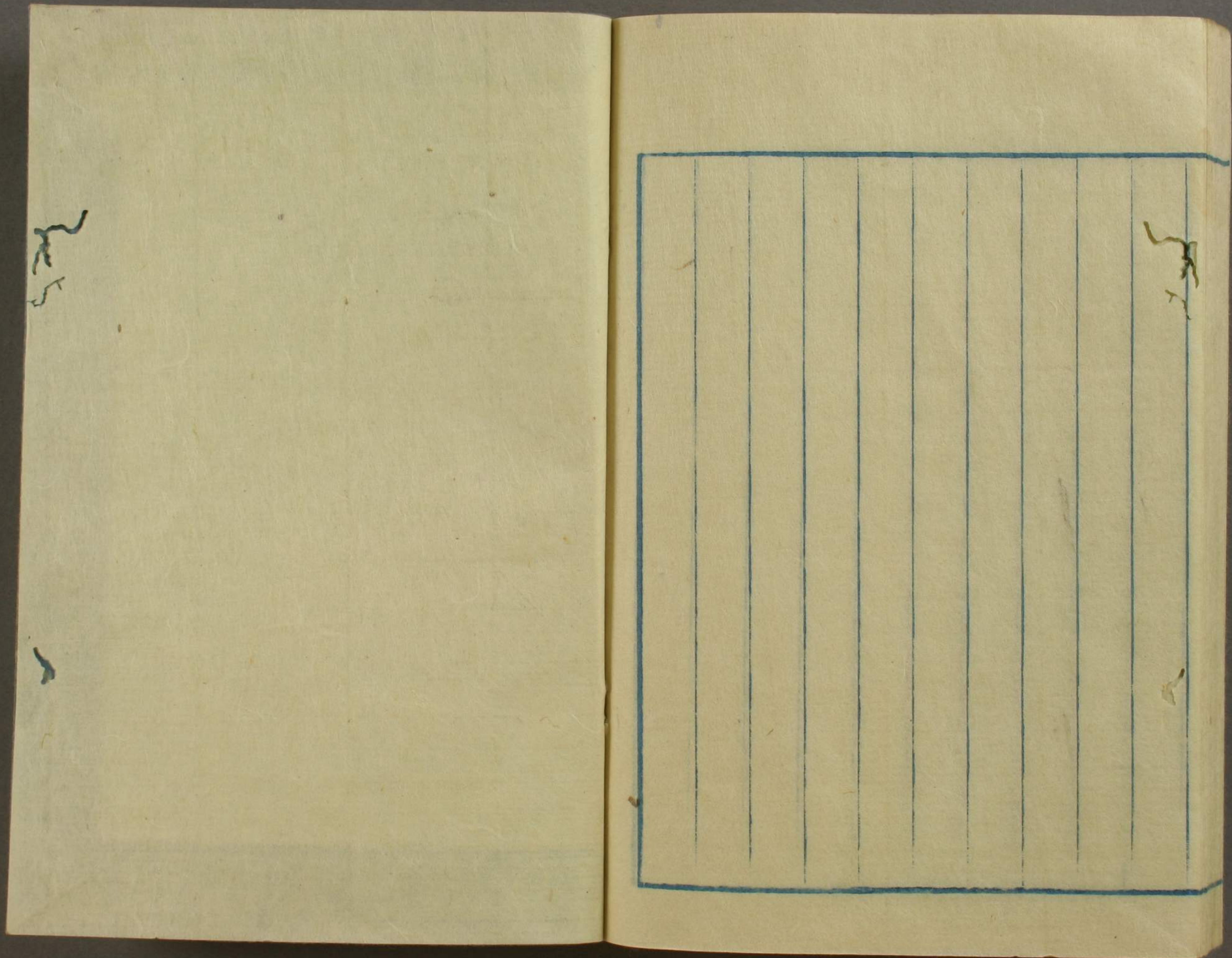






以下  
了 丁  
白紙







洋学文庫  
文庫 8  
C 81  
2